芭蕉元禄事業　奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成三十年十二月度　入選句（投稿総数三千二百七句・一般投句数六百三十五句）

選者　度会　さち子

特選

けもの鳴き時雨忌の山深くせり　静岡県浜松市　藤江　みち

二年前であったろうか、結びの記念館で、芭蕉涅槃図の展示があった。終焉の芭蕉を囲み、弟子のほか鳥、獣、亀なども来て嘆き悲しんでいる図であった。この句はそれを思い出させる。「山深くせり」は奥深い芭蕉の俳句、さらにはどこまでいっても益々深くなる俳句という山の奥深さとも言いえて佳。

母寝かせ家計簿つけて霜の夜　大垣市　山田　千歌子

母親を介護されているのだろうか。霜がふる夜、母親を暖かくして寝かせつけ、寝入った母親に安堵し、家計簿をつけている作者。これからが自分の時間。とはいっても、家事や介護、育児はまだまだ女性。介護保険はできても介護にかかる費用はやはり大きい。家計を管理し、介護をし、俳句も楽しんでいる、そんな暮らしの一コマがみえる。

幟旗一竿ごとに冬入日　不破郡垂井町　久保田　紘義

幟旗は祭りや神社の参道、また戦陣に立てられる。この景は決戦地や戦陣跡がある関ヶ原か。枯の進む荒涼とした地にたつ、風に鳴る幟旗。その竿のひとつひとつを赤く染める冬の落日。武将の名をそめた幟旗の一竿一竿には、それぞれの陣の物語がある。だが冬の陽は、敗者、勝者の区別なくしづかに照らす。「冬入日」は動かない。佳句。

秀逸

隙間張りしても入りくるもの多し　養老郡養老町　田中　紫香

愛はまだ果実のままの冬林檎　埼玉県所沢市　獅子谷　雪

植木鉢少しずらして冬仕度　東京都世田谷区　関戸　信治

風よりも光にゆれて散る紅葉　岐阜市　花川　和久

金華山見上げし枝に鵤の贅　本巣市　土川　哲生

シベリアの空の色した雁の群れ　揖斐郡大野町　豊田　美見

赤とんぼ背の赤子の手をのばす　大垣市　安田　むつこ

身籠りしこと告げに来る小春かな　愛知県西尾市　金子　恵美

一邑の後光のごとく冬の虹　三重県津市　村山　好昭

入選

小鳥来るここよここよと教へ合ふ　大垣市　傍島　豊子

手をとめて冬の虫きく厨かな　福井県敦賀市　山田　美千代

ゆつくりと大地に吸はれ一葉落ち　瑞穂市　伊藤　恵水

信長を逃れし仏薄紅葉　大垣市　遠藤　加容子

ペンキ塗る町の薬屋冬日差　各務原市　松尾　雅之

遷宮の小春の杜に稚児の列　不破郡垂井町　児玉　信子

小春日や新米ママの授乳室　安八郡神戸町　大槻　恭子

新米の湯気の向こうの祖父のしわ　東京都狛江市　椎野　一恵

散紅葉小さき仏の凭れ合ふ　岐阜市　伊藤　瑞実

冬の菊残り香すこし母の墓　大垣市　岡田　あや子

入選

路地抜けて骨董市や冬大師　大垣市　臼井　秀子

茶の花の小径明るし観音堂　大垣市　小林　研

軍手干す飯場に熱きおでん酒　大垣市　森川　きよ子

葬終へて山茶花白き軒端かな　大垣市　日比野　友子

四方枯れて修道院のマリア像　栃木県那須塩原市　垣内　孝雄

田に憩う農夫の頭上小鳥来る　東京都足立区　東　西南北

落葉降るまた降る落葉追うように　愛知県西尾市　金子　恵美

絵手紙の筆を止めたる夕時雨　大垣市　高石　政明

日あたつて動くものなき枯野かな　長野県下伊那郡　長沼　まさし

選者吟

白菜を括る輪中の土明かり　さち子